



Title	Renovation of Traditional Lao Stilt Houses in the Suburbs of Vientiane, Lao PDR.
Author(s)	Phongsavanh, Saysavanh
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58370
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	サイサワン ポンサワン Saysavanh PHONGSAVANH
博士の専攻分野の名称	博士(工学)
学位記番号	第 24612 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 工学研究科地球総合工学専攻
学位論文名	Renovation of Traditional Lao Stilt Houses in the Suburbs of Vientiane, Lao PDR. (ラオス・ヴィエンチャンの周辺地域における木造高床式伝統家屋の住宅改築に関する研究)
論文審査委員	(主査) 教授 阿部 浩和 (副査) 教授 奥 俊信 教授 横田 隆司 准教授 小浦 久子

論文内容の要旨

ラオスは経済発展が著しいインドシナ半島の中央部にあって、社会主義体制をもつ内陸国であり、その首都ヴィエンチャンとその周辺地域では1986年の経済開放政策以降、急速な都市化による都市景観の変容と人口集中による居住環境の変化が問題となってきた。本論文は、ヴィエンチャンにおいて失われつつある木造高床式伝統家屋に焦点を当て、その周辺地域に残る当該家屋のフィールド調査と居住者への聞き取り調査等を実施し、近年の生活様式の変容とそれに伴う居住者意識の分析を通して、木造高床式伝統家屋の住宅改築の現状と改築に関わる基礎的知見を明らかにすることを目的としており、今後のヴィエンチャンにおける郊外住宅整備に資することを旨とするもので、全5章で構成した。

第1章は序論で、論文の目的と関連する既往の研究についての概要を記述し、ヴィエンチャンの歴史的背景と都市的コンテクストを概観するとともに本論文の構成を示した。

第2章では現在のヴィエンチャンとその周辺地域における戸建住宅の状況を把握するため、ラオス国立大学の学生の家族84世帯にアンケート調査を実施した結果、回答者の多くが非伝統家屋に居住している一方、約4分の1は伝統家屋又はその改築家屋に居住していること、また伝統家屋の居住者の82%は二世帯以上の大家族である一方、平屋の非伝統家屋の居住者の55%は一世帯の核家族であること、住宅空間への満足度は伝統家屋の居住者において47%である一方、その改築家屋では65%と高くなっていることなどを明らかにした。

第3章では伝統家屋のうち木造高床式伝統家屋とその改築家屋に着目して、当該家屋の建築形態を評価するため、ヴィエンチャン郊外にある二つの村(ポウシ村、トマン村)を選定し、フィールド調査を実施した結果、当該家屋の建物高さの平均は6.4m、床高さの平均は2.3mであること、切妻屋根部分の基本寸法の平均は梁間方向が6.7m、桁行方向が9.8mであることなどを明らかにした。また基本となる切妻屋根とその附属部分による組み合わせのバリエーションを具体的な調査事例に適用して分析することで17タイプの建築形態構成を特定した。

第4章では木造高床式伝統家屋とその改築家屋における生活様式と居住者意識を把握するためポウシ村、トマン村の住民への聞き取り調査を実施した結果、1世帯あたりの家族の平均人数はポウシ村では4.5人、トマン村では4.6人で差はほとんど見られなかったが、トマン村では子供のいる核家族が58%である一方、ポウシ村は30%であった。また改築による床面積はトマン村で29.1%、ポウシ村で46.1%増加しているが、いずれの村においても1

度目の改築で多いのは主に水廻りの施設で、2度目は主に寝室や居間などが多く、3度目はその他全般的な改築であること、また将来木造高床式伝統家屋を建替えたいと考えている居住者は34%でその大半は若年層の家族に多い一方、現在の家屋をそのまま或いは改築して維持したいと考えている居住者は42%でそのいずれもが中高年層の家族に多いことが明らかになった。また改築パターンの分析から6種類の基本形を特定することで、一階部分を道路側に増築する場合は店舗などの設置が多く、ピロティを壁で囲む場合は親族の居住スペースに利用されていることなど、住民の生活様式や家族構成の変化に伴い、その家屋形態は数度の改築を繰り返しながら変化していることを示した。

第5章は結論で、本研究の調査分析で得られた結果を取り纏めるとともに、木造高床式伝統家屋の住宅改築の現状を明らかにし、今後ヴィエンチャン郊外の住宅整備において新しい生活様式に対応しながらも、地域に固有の伝統的特徴を維持していくための基礎的知見を提示した。

論文審査の結果の要旨

本論文は1986年の経済開放政策以降、急速な都市化と人口集中による居住環境の変化が問題になりつつあるラオスの首都ヴィエンチャンにおいて、失われつつある木造高床式伝統家屋に焦点を当て、その周辺地域（ポウシ村、トマン村）に残る当該家屋の住宅改築の状況と居住者の意識を調査分析することで、今後のヴィエンチャンにおける郊外住宅整備に資する学術的知見を明らかにしている。主な成果は次のとおりである。

- 1) ヴィエンチャンに居住する大学生に対してアンケート調査を行った結果、その約4分の1は木造高床式家屋を含む伝統家屋又はその改築家屋に住んでおり、その居住者の82%は二世帯以上の大家族であること、また住宅空間への満足度は当該伝統家屋の居住者において47%である一方、その改築家屋では65%と高くなっていることなどを明らかにしている。
- 2) 木造高床式伝統家屋の建物高さの平均は6.4m、床高さの平均は2.3mであり、切妻屋根部分の基本寸法の平均は梁間方向が6.7m、桁行方向が9.8mであることを明らかにするとともに、基本となる切妻屋根とその附属部分による組み合わせのバリエーションを具体的な調査事例に適用して分析することで17タイプの建築形態構成を特定している。
- 3) 木造高床式伝統家屋の改築状況について詳細な聞き取り調査による分析から6種類の基本形を特定し、一階部分を道路側に増築する場合は店舗などの設置が多く、ピロティを壁で囲む場合は親族の居住スペースに利用されていることを明らかにしている。
- 4) 当該家屋の改築は1995年以降に増加傾向を示しており、その改築プロセスにおいて1度目は主に水廻りなど衛生施設の整備が多く、2度目は主に寝室や居間など居住空間の増設が多いこと、またこれらの改築による床面積はトマン村で29%、ポウシ村で46%の増加が見られることなどを明らかにしている。
- 5) 当該家屋の家族構成の分析において、改築家屋の居住者には大家族に多く、親族や子供の増加に伴い寝室を分離している傾向が見られる一方、改築を行っていない家屋では核家族が多いことなど、住民の生活様式や家族構成の変化に伴いその家屋形態は数度の改築を繰り返しながら変化してきていることを明らかにしている。
- 6) 将来木造高床式伝統家屋を建替えたいと考えている居住者は34%でその大半は若年層の家族に多い一方、現在の家屋をそのまま或いは改築して維持したいと考えている居住者は42%でそのいずれもが中高年層の家族に多いことを明らかにしている。

以上本論文は、経済発展に伴う人口集中と居住環境の悪化が懸念されるヴィエンチャン郊外において、木造高床式伝統家屋の改築の現状を調査し、居住者の生活様式の変容と生活意識を分析することで、木造高床式伝統家屋の変容の実態を明らかにするとともに、新しい生活様式に対応しながらも、地域に固有の伝統的特徴を維持していくための学術的知見を明らかにしており、ラオスにおける今後の住宅整備に寄与するところが大きい。またその成果はラオスだけでなく多くの発展途上国における建築計画学、都市計画学の研究発展に貢献するものである。

よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。